

入 選

農園における1つの変化

～子どもたちの姿を見て思うこと～

入 選

株式会社シード・タウンマネジメント 石田真一様

2020年3月2日、全国すべての小学校、中学校、高等学校等は春休み開始まで臨時休校となった。しかし、4月になっても、5月になっても学校は再開されなかった。「不要不急の外出自粛」、「商業施設の休業」、「ソーシャルディスタンスの確保」などの言葉が世の中を飛び交い、街は静まり返った。公園の遊具には立ち入り禁止のロープが張られ、子どもたちは行き場をなくした。

私は、大阪府堺市において市民農園業(貸し農園業)に従事している。近年、農業の担い手や後継者の不足、農地地主の高齢化により、農地の維持管理が困難な状態となっている。非管理の農地はすぐに荒れ果て、いわゆる耕作放棄地となってしまう。弊社では、維持管理が困難となった農地を地主より借り受け、市民農園として再生させ、地域の方々に植物や土に触れる機会を提供している。弊社の社員数はたった2名、社長と私のみである。農園候補地探し、地主との交渉、行政への申請、農園の造成、農園管理作業、利用者の募集等のすべてを2名で行っている。現在、市内において14か所の市民農園を運営しており、農地の有効活用、高齢地主のお手伝い、地域の方々への農体験機会の提供を目的として業務に取り組んでいる。

新型コロナウイルスの感染拡大は、農園利用者数の激減を予感させた。しかし、減少は見られなかった。むしろ、利用者数は増加した。その理由は、以下

の3点にあるのではないかと考える。

1. 農園は三密にならない環境であり、十分なソーシャルディスタンスを確保することができる。
2. 農園への移動や農作業が、政府が推奨した散歩程度の活動に該当した。
3. 閉塞感が漂う生活において、植物、土、他の利用者とのふれあいがストレス解消につながった。

感染拡大以降、すべての農園において1つの大きな変化が見られた。各農園において子どもたちの姿を目にする機会が増えたのである。新型コロナウイルス問題以前、農園利用者の大部分は中高年の方々であり、子どもたちの姿はあまり見られなかった。しかし、問題発生以降は、学校休校、外出自粛、商業施設の休業等の影響を受けて、行き場をなくした子どもたちが農園へ足を運ぶようになった。お爺さんが小さなお孫さんの手をひいて、お母さんが小学生の息子さんを連れて、休日に親子4人で、といった具合で、子どもたちは農園へやって来た。最初、子どもたちは農園でただ遊んでいるだけであったが、幾度となく農園を訪れる内に、種まき、苗の植え付け、水やり、草抜きなどの農作業に自発的に取り組むようになっていった。時には友人を連れて農園を訪れ、子どもたちだけで楽しそうに農作業に取り組んでいた。

「いっぱい穫れたら、幼稚園の先生にあげるねん。」
と、笑顔でジャガイモを植え付ける幼稚園児。

園児。

「イチゴのスケッチ、小学校の宿題やと、休校中に課された植物観察の宿題を行う小学生。」

「日に日に大きくなっていく野菜を見ると、なぜか元気が出ます。」
と、足しげく農園へ通う中学生。

「これだ、一年間の麦茶が作れます。」
と、大勢の幼稚園児たちと大麦の収穫作業に汗を流す幼稚園の園長先生。

「農作業の時間が子どもたちにとって安らぎの時間となればと思っています。」
と、慣れない農作業に子どもたちと共に取り組む放課後デイサービスの施設長先生。

幼稚園、保育園等の園単位での利用を通して、農園が子どもたちの遊びの場、学びの場になっている様子であった。

2021年8月、「緊急事態宣言」、「まん延防止等重点措置」などの言葉が世の中に飛び交い、未だに子どもたちは窮屈な生活を強いられている。市民農園が子どもたちの笑顔の場になればと考えている。そして、市民農園での活動を通して農業に興味を持った子どもたちが、未来の農業、未来の農地維持に携わってくれることを期待したい。

講評



顧問 藤岡 成介

ドイツの「クラインガルテン」から発した、「市民農園」の仕組みですが、約30数年の間に日本の社会環境の中でさらに進化してきているのを感じます。ヨーロッパにおける自然療法(セラピー)の発祥は、修道院の中庭にあります。日本においては寺院の庭にありましたが、現在の日本の都市部に生活拠点をおく人々にとっては、市民農園かもしれません。

今回の新型コロナウイルスの問題から、生活スタイルも急激に変化してきています。住居だけでなく、学校、医療施設、福祉施設、オフィス、ショップ、工場空間など、さまざまなガーデンセラピーの普及を進めていく中で「市民農園」での効果が非常に高いことが分かりました。また、環境の仕組みができれば自然にガーデンセラピーが広がり、進化していくことも発見させられた素晴らしい作品です。



3



2



1



5



4



6



8



7



10

都市の農地 市民農園で再生

大阪府中央区 シード・タウンマネジメント

社員2人で12農園運営

同社の市民農園の利用者は約300人。1年ごとの年間契約で、更新も可能

地域の農地、農業を守りたい

高齢地主の悩み解消へ

「都市部の農地、農業を守りたい」という思いをもち、市民農園を運営するシード・タウンマネジメントが、高齢地主の悩みを解消するために、市民農園の運営を代行するサービスを提供している。同社は、都市部の農地を再生し、市民農園として活用することで、高齢地主の悩みを解消し、地域の農業を守りたいという思いをもち、市民農園の運営を代行するサービスを提供している。同社は、都市部の農地を再生し、市民農園として活用することで、高齢地主の悩みを解消し、地域の農業を守りたいという思いをもち、市民農園の運営を代行するサービスを提供している。

9

- 1. ジャガイモを植える子
- 2. 耕耘機を押す子
- 3. 植物観察の宿題を行う小学生
- 4. 大麦の収穫を行う幼稚園
- 5. 水やりをする子
- 6. 農園で遊ぶ子
- 7. 農園の様子1
- 8. 農園の様子2
- 9. 弊社に関する新聞記事(全国農業新聞)
- 10. 農園候補地にて私